

十条家の
三人の
ご主人様と
私

～朝のご奉仕編～



十条家

前当主

十条 一徹

(じゅうじょう いってつ)

(78)

専属メイド

静流

(しずる)

(21)

現当主(長男)

十条 誠士

(じゅうじょう せいじ)

(45)

長男の息子

十条 悠

(じゅうじょう ゆう)

(20)

私には、三人のご主人様がいます。この十条家の屋敷の前当主である大旦那さま。その長男である十条家当主の旦那さま。それからそのまた長男の十条悠——若さまだ。

奥様方はとうに亡くなり、今や大きなお屋敷には三人の主人と、彼らにお仕えする私、静流だけが住んでいる。

男やもめの家の中。主人たちの性欲を処理するのもまた、旦那様がたにお仕えする私の仕事だった。

朝はまず大旦那さまの部屋で一仕事だ。老人は朝が早いというけれど、その通りで。

大旦那さまはいつもこの家の誰よりも早くに目が覚める。

夜が明けるのと変わらぬ時間に部屋に着き、襖を開けると今日もまた、大旦那さまは目を覚ましていた。和室の真ん中に敷かれた布団の上で目を開けている大旦那さまに、深々と両手について挨拶をする。

「おはようございます、大旦那さま。本日もつとめさせていただきます」

布団をじわりと捲りあげると、大旦那さまの枯れた老木のような体を包む浴衣の前が、不自然なほど大きくせり上がっていた。

男というのはいくつになっても性欲が減らない、とは聞いていたものの、私もこの家に仕えるまで半信半疑であつた。

私は大旦那さまの着物の前を左右に押し広げ、暗がりに屹立する赤黒い肉棒に触れた。

熱い。そして、樹液をため込んだ古木のように、しつとりと硬い。

いつも、私の男の身体を雌のように調教し、気持ちよくしているもの。

手のひらで包み込むだけで、知らずに唾液がじわりと口内に溢れ、たまつていった。口を開いて、その亀頭からゆつくりと迎え入れる。口いっぱい頬張り、逞しい幹に舌を這わせ、入りきらない根元は両手でじっくりと擦り上げる。私の鼻にかかったような、ねつとりとした甘い喘ぎが静かな和室に木霊するの
が、たまらなく恥ずかしい。

必死になつて口腔の熱で包み込んでいると、大旦那さまのペニスさらさら一回り大きく膨らみ、私の喉の奥を塞いだまま、どろりと破裂した。

「んっ、くぬう、ふう……」

青臭く濃厚なそれを、喉を波打たせて必死で飲み下す。飲みきれない分が口の端から細い糸を引いて垂れた。それを指先で拭いとり、大旦那さまの視線を感じながら、汚れた指先を舌を出して舐め取って

く。

「んっ、ちゅっ……んっ」

指の股まで舐めとり、ふと見下ろすと。

「っ……」

一度達したというのに、大旦那さまのペニスをはなえる兆しすら見えず、天をつくかのようにそそり立っていた。先ほどの口淫での唾液と自身の蜜で、ぬらぬらと怪しい光を放っている。

こくり、と知らずに喉が鳴る。

「静流、おいで」

大旦那さまの許しを得て、私は早くなる鼓動を抑えつつ、大旦那さまの股間に跨った。ご主人様方の希望で纏っているメイド服のスカートの裾を、じわじわと持ち上げていく。

「見えないぞ、静流。もっとたくし上げなさい」

「は、い……。申し訳ありません……っ」

白いエプロンごと紺色のスカートを捲り上げ、口でしっかりと噛み締める。露わになったのは、女性ものの白いレースの下着に包まれた、私の、男の象徴だった。すでに先端からは我慢汁がしとどに溢れ、け



屋敷の最上階。そこに部屋を構えるのは、この家の次期跡取りであり、最も若く、それゆえに加減を知らない凶暴な欲望を滾らせている「若さま」だ。

階段を一段、また一段と上がるたびに、私の中に残された体力が削られていく。同時に、若さまの顔が脳裏をよぎり、胸の鼓動が早くなった。旦那さまの老獪さ、旦那さまの支配欲とは違い、若さまが私に求めるのは、純粹で暴力的なまでの「執着」だったからだ。

若さまの部屋の前に辿り着き、震える指先でドアをノックする。

「静流です。……若さま、おはようございます」

返事はなかった。代わりに、中から勢いよく扉が開かれ、強い力で私の手首が掴まれた。

「遅い、静流。待ちくたびれたぞ」

視界がぐにやりと歪み、気付けば私は部屋の中へと引きずり込まれ、ふかふかのベッドの上へと押し倒されていた。

見下ろしてくるのは、まだ十代の名残を残しながらも、男としての骨格を完成させつつある若さまの、爛々と輝く瞳。

「じいさんと親父の匂いがする。……あいつらに、たっぷり鳴らされてきたんだろ？」

若さまは私の首筋に顔を埋め、深く息を吸い込むと、嫉妬と興奮の混ざった歪な笑みを浮かべた。その手はすでに、私のメイド服のボタンを容赦なく引きちぎらんばかりの勢いで外している。

「……っ、若さま、まだ、お体に障ります……」

「うるさい。俺はあの二人みたいに、優しく順番なんか待ってやらないからな」

若さまの熱い手が、私の太ももを強引に割り、すでに二人の主人に酷使されて熱く充血している秘密の割れ目へと、容赦なく指を突き立てた。

若さまの長い指が、大胆那さまと旦那さまの熱で完全に解れきっている私の最奥を、じゅぷ、ぬちゅ……と、執拗にかき回す。それだけで、中に溜まっていた二人の主人の残滓が、粘り気のある糸を引いてどろりと若さまの指を伝い、私の口からは情けない喘ぎが漏れた。

「あ、あぐっ……！ 若、さま……っ、指で、そんなに、弄られたら……ッ」

十条家の三人のご主人様と私

発行日：2026年5月26日

著者：かのう。

サークル：まるつと

表紙・本文制作：かのう。

© 2026 かのう。